

氏名	下川 茂
学位	博士
専門分野の名称	文学
学位授与番号	博乙第4121号
学位授与の日付	平成18年3月24日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	『赤と黒』と聖書—ジュリアンとイエス物語—
学位論文審査委員	主査・教授 木之下 忠敬 教授 永瀬 春男 助教授 延味 能都 助教授 上田 和弘 助教授 萩原 直幸

学位論文内容の要旨

序

先行研究への批判とテーマの設定。

スタンダール研究家は『赤と黒』の主人公ジュリアン・ソレルの上昇的性格を強調し、下降的性格を無視する傾向がある。上昇・下降・上昇という運動を繰り返すジュリアンからイエスとの関連性を指摘。

第1部：上昇と下降のテーマ

第1章（大規模な上昇と下降）・第2章（小規模な上昇と下降）・第3章（多様な事物の上昇と下降）・第4章（テーマの変奏）・第5章（レナール夫人）・第6章（マチルド）・第7章（ジュリアンの先駆者たち）

ジュリアンは小説冒頭から下降する形で現れ、その後、地位・収入・知識等様々な面で上昇過程に入るが、やがて犯行によって、一挙に死刑囚へと転落する。心理的には、高揚と自己卑下を繰り返す。また具体的な行動として、高い場所に頻繁に上るが、上昇はしばしば下降を伴っている。さらに、彼の周りで、彼の内部の力の影響を受けたかのように、様々な人物・事物が上下動する。

しかし、最後の最も劇的な下降をもたらす犯行は、牢獄での愛する人との再会へとジュリアンを導き、恐怖のない幸福な死の後、故郷の高い山の洞窟に彼は葬られる。山国の故郷から平地のパリへ出て、最後に再び故郷の高い場所に戻るといふ、この大きな下降—上昇の相は、作品に撒布された数多くの聖書と関連する細部と相俟って、ジュリアンの最大のモデルが聖書のイエスであることを示している。

第2部

第1章（原罪と傲慢）・第2章（イエスの予型）・第3章（イエスとしてのジュリアン）・第4章（反イエスとしてのジュリアン）・第5章（スタンダールのイエスとしてのジュリアン）・第6章（夢想と現実）

イエスと同じように大工の息子として生まれたジュリアンは、聖書に通じ、世間の評判になり、家族と故郷の人々に嫉妬され憎まれ、この世の不正を憤り、この世に憎まれ、裁判にかけられ、死刑判決を受け、死の恐怖に苦しみ、嘲笑う（と彼が想像する）見物人の前で処刑され、洞窟に埋葬される。

しかし、ジュリアンはイエスの教えに背く人間でもある。人目に立つように教会で祈り、悪魔の誘惑を受け入れて富と高い地位を望み、衣服と上席権にこだわり、中傷し、人を害し、姦通に傲慢の快楽を味わい、復讐のために殺人の罪を犯す。犯行後も彼は野心家であったことを後悔していない。

さらに、ジュリアンは、少年時代に失った母に対する愛を原動力に、ヴォルテールの理神論、ルソーの作品、フェヌロンの思想等の影響下にスタンダールが独自に生み出した、他に類のないイエスでもある。イエスと母マリアが父ヨセフを排除して愛し合ったように、ジュリアンとレナール夫人は、母と息子のように愛し合う。そして、死後來世で愛する母との再会を望んだ作者の秘められた願望が投影されて、ジュリアンとレナール夫人の来世での再会が、様々な細部によって示唆される。イエスと母マリアが昇天と被昇天によって天国で再会したように、スタンダール独自のイエスであるジュリアンは、「真の人間」でありかつ「真の神」でなければならぬ。レナール夫人はジュリアンを神のように愛しており、ここで、作者は伝統的なイエス観に近づいている。

結論

旧約聖書はアダムの墮罪 *chute* (=転落) から始まる。アダム以降の人間は地上において上昇と下降を反復する。神の摂理によって高い地位を与えられた人間は、やがて傲慢になり、神の命に背き、罰を受けて転落する。旧約聖書は、牧童から王侯にいたるまで、上昇一下降を繰り返す人物で満ち満ちている。それに対し、新約聖書のイエスはアダムの犯した原罪を贖うために、天上から下降し、死後再び天上に上る。『赤と黒』は、この上昇と下降の壮大な書である聖書を反復する西欧の数多くの小さな物語の一つである。

しかし、『赤と黒』は単なる護教論的小説ではない。そこには、聖書のイエスに対する作者スタンダールの親和と反撥とそして個性的な反応が複雑に盛り込まれている。親和は、主人公の生涯がイエスのそれをなぞるように進行する点に、反撥は、主人公がイエスの教えに背き、幾つかの点で最後までそれを貫くところに、そして個性的な反応は、母性的性格の人妻と姦通し、しかも彼女から神のように愛されるという、極めて異端的なイエス像と伝統的イエス像が縋り交ぜになった主人公に現れている。『赤と黒』は、聖書の見事に創造的な反復になっている。

学位論文審査結果の要旨

学位論文の審査会は平成18年2月16日(木)、13時30分より、木之下忠敬教授(主査)、永瀬春男教授、上田和弘助教授、延味能都助教授、萩原直幸助教授の全審査委員出席の下に文学部会議室において行われた。

論文本体はA4版用紙、裏表印刷で337頁。論文構成は「序」、「第1部」(1章～7章)、「第2部」(1章～6章)、「結論」、「参考文献一覧表」、「索引」、「『赤と黒』と聖書対照表」からなる大部のものである。

「序」において論者は「学位論文の内容の要旨」で述べたように、スタンダールの『赤と黒』(1830年刊行)の解釈を聖書との関連において、すなわち、主人公ジュリアンをイエスに

なぞらえる新たな解釈を提示する必要性を主張する。この解釈のきっかけになったものは、先行研究の数多くが、ジュリアンの「上昇」する側面に着目し、これを強調しすぎる傾向があり、そのために、ジュリアンの「下降」する側面がなおざりにされていることを強く意識したためである。しかしながら、ジュリアンとイエス、または『赤と黒』と聖書との関係は論者のみの独創的知見ではない。これまで既にこのことを指摘した論考が存在することは存在している。だが、これらの指摘は断片的なものに終始し、『赤と黒』と聖書、ジュリアンとイエスとの関係を作品全体のテーマとして総体的に一貫して論じた論考はいまだに存在していない。論者はこの点に着目し、『赤と黒』に見られる、「上昇と下降」または「下降と上昇」という運動が聖書における「下降と上昇」、特に、イエス・キリストの「下降と上昇」とのテーマ的関連が如何なるものであるかを検証し、論を展開しようと試みる。これは、非常にユニークな着想であり、かつ、根気のいる壮大な作業であると思われる。論者は、当時スタンダールが読んだであろうと思われる、ルメットル・ド・サシ訳のフランス語訳聖書、及び、その挿絵入り簡約版『ロワイヨモン聖書』、当時の『教理問答書』までも駆使し、『赤と黒』と聖書の関係を明らかにしようとする。

「第1部」：「第1章」で「大規模な上昇と下降」という視点から主人公ジュリアンの社会的地位の変化とそれに伴う収入・貯蓄の変化を論者は検証する。社会的地位の変化は「製材業者ソレルの息子（大工の息子）」—「レナール家の家庭教師」—「神学生」—「ラ・モール侯爵秘書」—「軽騎兵中尉ジュリアン・ソレル・ド・ラ・ヴェルネ」と上昇を続ける。そして貴族に列せられ、社会的地位上昇を極めたジュリアンは、今度は逆にレナール夫人殺人未遂によって、死刑判決を受け、もとの「製材業者ソレルの息子（大工の息子）」として断頭台に上って死ぬ。当然のことながら、ジュリアンの社会的地位上昇に伴って、収入は増え続ける。断頭台に上る前、彼はそれまでの蓄財を兄と父に遺贈し、無一文になって死ぬ。これと対応する形で、物語の舞台は、ジュリアンの生地、山国フランシュ・コンテ地方（高地）—平地パリ—山国フランシュ・コンテ地方という変化しており、これも大きな「下降—上昇」というテーマを形成している。この「上昇—下降」、「下降—上昇」という作品最大のテーマをイエスの「下降—上昇」という聖書におけるテーマと論者が関連付けたのはおおきな着眼といえるであろう。

「第2章」、「第3章」、「第4章」ではそれぞれ「小規模な上昇と下降」、「多様な事物の上昇と下降」、「テーマの変奏」という形で、ジュリアンの精神的（心理的）上昇と下降、また、彼の生地フランシュ・コンテのヴェリエールの町の地理的配置の高低と登場人物との関係、ジュリアンの住む部屋の高低、彼自身の上下動の動きなどが検討される。

「第5章」、「第6章」では登場人物の中で最も重要な役割を果たす、レナール夫人、マチルド侯爵令嬢の精神的、身体的上下動がジュリアンとの関係で検討される。論者はマチルド嬢との恋愛関係は「傲慢と傲慢との地上的関係」とみなし、一方、レナール夫人との関係を「地上的であると同時に天上的」なものとみなしている。

「第7章」では、論者は「ジュリアンの先駆者たち」と題して、ナポレオン、ダントン、バルナーヴ、ルイ・ジャンレル（主人公ジュリアン・ソレルのアナグラム）、ボニファス・ド・ラ・モール、シーザー、オセロなどとジュリアンとの関連性を検討する。特に最後の二人はシェークスピアの作品、『ジュリアス・シーザー』、『オセロ』において癲癇の発作をおこすのだが、主人公ジュリアンも癲癇ではないかと疑われる場面がある。しかし、これまで様々な形で検討されてきたジュリアン像のなかで、誰もがはっきりと提示しなかった唯一の人物がいる。「製材業者の息子」でありながら、何故か作品中で度々「大工の息子」とよばれるジュリアン。作品全体にわたる大きな上下動のひとつとして、ジュリアンの活動の場の変化があり、山国フランシュ・コンテから平地パリへ、そこから再び山国フランシュ・コンテへと描かれる下降—上昇の線。ジュリアンが最初に作品中に登場する時、製材所の高所から下へ降ろされること。上下動

を繰り返す波乱の生涯を送ったのち、故郷に戻り、レナール夫人を狙撃し、逮捕され、裁かれ、地下牢に入れられ、処刑され、死後は高い山の岩窟に葬られるジュリアン。論者は、このように、その内部に無数の小さな上下動を含む規模の大きな下降—上昇の線を描くジュリアンの生涯を、天上から地上に下降し、死後復活して昇天したとされるイエスの生涯と重ねあわす必要があると主張する。

「第1部」における論者の主張は非常にはっきりとしたものがあり、説得力がある。ただし、このようなテーマ論的な方法は、しばしば、細かい事実を漏れなく拾い集める必要があることから、論の進め方が冗漫なものに陥りやすい。つまり、繰り返しが多くなる傾向が生じるのである。本論文も少なからずこの傾向に陥っていることは否めないであろう。だが、論者が、テクストの検証に遺漏がないことを目指したことは致し方のないことである事実も認めざるを得ないところである。

「第2部」は「ジュリアンとイエス」と題されており、論者は聖書を媒体としてイエスとジュリアンとの関連を検証していく。

「第1章」では「傲慢」の罪によってアダムとイヴが楽園から追放（墮罪）されたことと、ジュリアンの傲慢さが比較され、聖職者希望であったジュリアンと聖書の教えとの関係が検討される。「七つの大罪（「傲慢」、「貪欲」、「羨望」、「大食」、「色欲」、「怒り」、「怠惰」）」の一つである「傲慢」からは「偽善」と「野心」という罪が生れると聖書ではされているが「偽善」と「野心」はジュリアンが社会的地位上昇を願っている間には常に彼について回るものである。論者は「傲慢 *orgueil*」という語の歴史的意味変化をも考慮に入れつつ、「旧約聖書」、「新約聖書」における「傲慢」への罰、そこから生じる人間のこの世における上下運動（「上昇と下降」）、そして人間救済のために地上へと「下降」し、その後、天上へと「上昇」するイエスについて、ジュリアンが如何に聖書およびイエスの教えに詳しかったかを示す。

「第2章」ではアダム、ヨセフ、モーセ、ダビデに関してこれらをイエスの「予型」とする考えを提示し、このような「予型論」にスタンダールが詳しかったことを例をあげて示している。これは、「第3章」への論の展開の橋渡しであり、重要な部分であるので論者はここの論証を慎重に行っている。

「予型論」はイエスに先行する人をイエスの降臨を予め示す人物と捉えることであるが、この考えかたは、同時にイエス以降の人間をもイエスの再来と考えることにつながる。論者はスタンダール自身が自らをイエスに譬えた例や作品中の登場人物をイエスに譬えた例を引き合いに出し、「第3章」の「イエスとしてのジュリアン」へと論を進める。この論の進め方は巧みである。

「第3章」は「イエスとしてのジュリアン」と題されている。ここでは、「大工の息子」、「釘」、「エジプト逃避」、「東方三博士」、「聖母マリア」等々、聖書の記述と『赤と黒』の記述との比較・関連付けが「イエス＝ジュリアン」という観点から詳しく行われる。ここの論述に関しては次の「第4章」、「第5章」と同じく、徹底して論理的でありかつ実証的であろうとしている。

例えば「28「三」と「十」と「赤」の小見出しの部分におけるジュリアンの発言：「謀殺です。（・・・）刑法 1342 条の規定は明らかです。私は死刑に値し、それを待っているのです。」に関し、「1810 年公布の刑法には全部で 484 条しかなく、ジュリアンの犯行は 295 条と 296 条に相当する。スタンダールが与えた 1342 条というのは、したがって事実と一致しないが、1、3、4、2 と分解すると、順序は違っているが、1 から 4 までの最初の 4 つの数となり、合計すると 10 になる。1 から 4 までの最初の数の合計としての 10 は、古代ギリシャのピタゴラス学派によって完全数として尊重された。そして、旧約、新約両聖書にも遺漏なき全体を表す数として度々登場する。旧約では、十戒（『出エジプト記』XX-1-17）、第七の月の十日を贖罪の日とする規定（『レビ記』XVI-29-30）等、新約では、十人の乙女の譬話（『マタイ』XXV-1-13）、イエ

スに癒される十人の癲病患者（『ルカ』XVII-12-19）等がそれである。「1342」という数字をジュリアンの犯行に適用すべき法律に与えた時、作者は、「十戒」を意識していたのではないだろうか。」と論を進め、次に「十戒」と『赤と黒』との関係へと論を進めるのであるが、このような論の進め方は読む者を次々と作品の新しい側面と解釈へと誘って倦ませるところがない。

「第4章」は「反イエスとしてのジュリアン」と題されていて、ここではジュリアンのイエスの教えに反する側面の検討がなされている。論述の仕方は前章と同じである。

「第5章」、「第6章」はそれぞれ「スタンダールのイエスとしてのジュリアン」、「夢想と現実と作品」と題されていて、前2章の「イエス的ジュリアン」、「反イエス的ジュリアン」を統合するものとして提示されている。この章はこれまでとは違い、スタンダール自身の個人史が中心として資料の供給源となっている。論者は、スタンダールの『イタリア絵画史』、『アンリ・ブリュラーレ伝』、『書簡集』、『日記』、などから、スタンダールがどのようなイエス観、キリスト教観を抱くようになっていったのか、そしてそれは何故なのかと問う。18世紀的合理的精神に培われて育ったはずのスタンダールがフェヌロン、ヴォルテールなどの理神論的影響を受けたであろうと考えられるにも拘らず、それよりも伝統的な旧約的な、もっと厳しく人間を罰する正統的なキリスト教の神の存在を彼は信じかつ恐れていたのではないかと、論者は提起する。その理由は、幼少にして母を失い、その責任は父にあると考えていたスタンダールが父を殆ど憎んでいたとしか考えられないこと、母の死は産褥死であるから、自分が憎む父と、自分が愛してやまない母との間に新しい子供が生まれることが理解できなかった、いや理解しようとせず、母をもこの点で憎んだのではないかということ、さらに言えば、父への憎悪と母への熱烈な愛から、母の死までもスタンダールは願ったのではないか、というようなことが考えられうるからであり、そこからスタンダールが決して告白することのなかった罪責感が彼の心から離れなかったのではないかと論者は言う。この罪責感から自らを解放するために、スタンダールは独自のイエス観・キリスト教観を作り上げたのではないか。そこでは、来世、天上において母と再会し、愛を確かめ合うという、「来世」への信仰が必要であり、一方では理神論的偏向としての、「人間イエス」を考える自分を肯定する必要もある。人間でありながら同時に神でもあるというスタンダールのイエス観（イエスの二重性）が投影されているのがジュリアンなのではないかと論者は指摘する。特に『赤と黒』の原型と指摘されている「ベルテ事件」（ベルテは元神学生）の詳細を知ったスタンダールがそこに母子相姦願望だけでなく、母に対する嫉妬と殺意までがあったことを知ったことは大きな意味を持つと論者は指摘する。

この「第5章」、「第6章」の論述はこれ以前の論述と異なり、心理分析的、精神分析的といえるものであるが、事実の一方的解釈や独善に陥ることなく着実に進められている。スタンダール個人に関わる資料やベルテ事件に関する資料の扱い方も堅実で遺漏がない。「第1部」のある種の冗漫さに比べ、「第2部」全体の論述・論証の進め方は緻密でありながらスピード感があり、読む者を惹きつけてやまない。幾つかの解釈が可能な場合でも、自分の解釈提示に関し、非常に詳しい脚注で論述の根拠を明確に提示しているが、この脚注の長さも全く気にならないほどである。

「結論」で論者は「反イエスとしてのジュリアンは、彼が幾度となく繰返す上昇—下降運動の動力であり、イエスとしてのジュリアンは、彼の大きな下降—上昇運動の動力である。そして、これら二つの動力が外部に溢れ出すと、ジュリアンの周りで様々な人物や事物が上下動することになる。スタンダールのイエスとしてのジュリアンは、作品が聖書の単なる反復と化して護教的作品となることを防止し、同時に作品に個性的な色彩を与えている。三つのうちいずれを欠いても作品はその豊かさと魅力を失うだろう。イエスに対する著者の親和と反撥とそして個性的な反応を含む『赤と黒』は、作品の構成・内容いずれの点から見ても、聖書の見事に創造的な反復になっている」と言っているが説得力のある言葉だと思われる。

全体にわたり、膨大な先行研究の緻密な検証と批判、聖書の的確な検索と『赤と黒』との対

照など、多大の労力を要する研究作業でありながら、これを最後まで成し遂げたことは評価に値する。

最後に、付録として『赤と黒』と聖書対照表」が添えられているが、『赤と黒』を聖書と対照して読む場合にこれは非常に重要にして貴重な参考資料となるものである。残念なことに、この対照表はページのみで提示に終わっているが、関連事項に関する各テキストの原文がそのまますべて提示されていたらこの資料価値は一層優れたものになっていたことであろう。著書として改めて刊行する場合にはこのことを考慮に入れて、論文本体もさることながら、「対照表」の資料的価値を万全なものにすることを期待したい。

以上のことから、審査委員会は全会一致で、この学位請求論文が「博士」の学位に値するものと判断する。

2006年2月17日

学位審査委員会